常葉大学外国語学部紀要〈論文〉
第39号　　2023.3.　　23頁～　33頁

『スター・トレック：ピカード』における『テンペスト』の利用

佐　藤　由　美

The Use of *The Tempest* in *Star Trek: Picard*

SATO Yumi

2022 年 11 月 4 日受理

抄　　録

シェイクスピア作品は近年ポピュラーカルチャーにおいても引用および翻案・流用されている。意外に思えるが SF ドラマにおいても同様であり、例えば『スター・トレック』シリーズにおいてシェイクスピア作品の引用は頻繁に行われている。本稿では 2020 年に配信された『スター・トレック：ピカード（シーズン 1)』における『テンペスト』の用いられ方を考察した。『テンペスト』の引用および大幅な翻案は最終エピソードの終盤においてのみ行われるが、それにより主要な登場人物のうち二人の関係性がより印象深く伝えられる。プロスペローとエアリエルと異なり、ピカードとデータは人間とアンドロイドという立場の違いを超え愛と信頼を互いに持ち、それを伝え合うことができた。さらには『スター・トレック』においてシェイクピア作品が引用ないし利用される場合、西洋文化圏における価値観が背後にあることもわかる。

キーワード：シェイクスピア、翻案、ポピュラーカルチャー、SF ドラマ、
『スター・トレック』シリーズ

1.1　シェイクスピア作品の引用、翻案ないし流用の多様性

シェイクスピア作品はそれ自体が読まれる、ないし上演されるのみならず、よく知られた一節が他の作品内で引用される、またはある場面が観客ないし読者の生きる世界に近づけるべく改変される場合も多い。そのような引用、翻案および流用の歴史は長く多様である。ポピュラーカルチャーとの関連も深く、戯曲、小説、映画、テレビドラマ、ゲームなど他分野にわたる。意外に思えるが SF ドラマにおいてもそれは言える。本稿ではアメリカの SF ドラマシリーズ『スター・トレック』（*Star Trek*）におけるシェイクスピア作品の翻案の在り方を、一作品に限定して考察する。

1.2 『スター・トレック』とシェイクスピアとの関連

考察の前に、『スター・トレック』の概要をまとめる。これは、数百年後の宇宙を舞台としたSF作品で、多くのテレビ放映作品、映画、アニメ等を含む長大なシリーズである。パラマウントの公式サイトで歴史の古さとシリーズの多様さがうかがえる。[1] シリーズにより年代は異なるが舞台は数百年後の宇宙であり、地球人は宇宙艦隊を率いて宇宙に進出している。ある時は異星人と対立し、またある時は協力しながら自らも成長し、進出を続けている。SFであるとともに、人間ドラマでもあると言える。

この作品群ではシェイクスピア作品の引用は初期からなされている。リチャード・バート（Richard Burt）によれば初出は『宇宙大作戦』シーズン1の第13話で、シェイクスピア作品を上演する劇団が登場する場面である。[2] 引用は特に『宇宙大作戦』（*Star Trek: The Original Series*）、『新スター・トレック』（*Star Trek: the Next Generation*、以下 *TNG*）、および『スター・トレック：ディープスペースナイン』（*Star Trek: Deep Space Nine*）に多い。このシリーズにおいてシェイクスピア作品の引用がしばしばされているという事実は英語圏では広く認識されているようで、そのことはウィキペディアの英語版にも“Shakespeare and Star Trek”という項目が設けられていることからうかがえる。[3] また、アカデミズムにおいてもこの事実が言及されている、もしくは研究対象となっていることが *Google Scholar* からうかがえる。例えば“Star Trek Shakespeare”と入力した場合16,600件という結果が得られた。[4] 分野を問わずに検索した結果であるが、英語圏ではポピュラーカルチャーにおいてもアカデミズムにおいても、『スター・トレック』がしばしばシェイクスピア作品を数多く引用していること自体が認識され、研究対象になっている可能性が高い。

また、シェイクスピア俳優として知られている俳優が少なからずこのシリーズの主要人物を演じている。例えば『宇宙大作戦』のカークを演じたウィリアム・シャトナー（William Shatner）、*TNG* でピカード（Picard）を演じたパトリック・スチュワート（Patrick Stewart）であり、映画『スター・トレックⅥ 未知の世界』（*Star Trek VI: The Undiscovered Country*）に出演したクリストファー・プラマー（Christopher Plummer）などである。この事実を知っているとより興味深く感じられる演出もある。例えばスチュワートが主演する *TNG* では艦長室にシェイクスピア全集が置かれている。ピカードが全集を手に取っている場面からは、彼が古典に関する教養を有する人物であるという設定がうかがえる。[5] またアンドロイドのデータ（Data）は人間について知るための一環として何度かシェイクスピア作品の練習を行うが、いずれの場面でもピカードが演出者のように傍らで見守っている様子が示される。[6] スチュワートが著名なシェイクスピア俳優の一人であると知っている視聴者はそのような場面で楽屋落ち的な笑いを漏らしたであろう。

このように、『スター・トレック』とシェイクスピア作品は多様な形で関連づけられているが、未来の世界を扱うSFドラマに古典作品の引用を盛り込む意図は何だろうか。これまでにいくつかの説が出されているが、以下はそれらの要約となるであろ

う。シェイクスピアを含む数種類の古典作品が引用されていることに関して言及したものである。

> This layer of sophistication serves an important function, for it allows *Star Trek* to bridge the gap between the modern world and the imaginary 23rd-century in which it is set. Such a reliance upon the fruits of Western literature gives *Star Trek* an intellectual credibility which makes is more acceptable to the typical Western audience, while at the same time appealing to the popular imagination and understanding of what Western culture embodies. The world of *Star Trek* stands as a remarkable study of "Popular Culture" at its best. [7]

この文は『スター・トレック』が西洋文化という枠組の中でどう位置づけられるかを考察しているものである。「西洋文学の成果に依頼することで未来を扱うSF作品は受け入れやすいものとなり、ドラマとしての信頼性を与えられ、視聴者は西洋文化の具体化しているものをポピュラーな形で想像し理解するように訴えかけている」と主張している。とはいえ、それは全体的な傾向であり、個々の作品中では引用にどのような位置付けがされているか、またそれによりどのような効果が生じるかは異なると思われる。

2 『スター・トレック：ピカード』

上であげたことを考察するために今回はシリーズの中から最新シリーズの一部『スター・トレック：ピカード』(*Star Trek: Picard*、以下 *PIC*) シーズン1を取りあげる。[8]

作品世界は24世紀末に設定されており、地球人がこの時点で対立している異星人はロミュラン人である。作品世界の始まる14年前、人口生命の存在を一切否定するロミュラン人の一派が、シンスと呼ばれる高度なアンドロイドたちのプログラムを狂わせたため、シンスが火星で暴動を起こし壊滅的な被害をもたらす。同じ頃、ロミュラン人の住む惑星が超新星爆発により打撃を受けるが、宇宙艦隊は火星に生じた被害を理由に救出を拒む。可能な限り多くのロミュラン人を救出しようというピカードの提案は宇宙艦隊に聞き入れられず、彼は抗議を示すため提督の職を去る。その後、火星での事件をきっかけとしてシンスに関する研究は一切禁止され、その存在は認められなくなる。

主要人物にはピカードのほかに、映画『ネメシス／S.T.X.』(*Star Trek Nemesis*、以下 *NEM*) の最後で宇宙艦隊を救うために殉職したが、その直前自己の意識を別の個体に転送および保存した部下のアンドロイド、データが含まれる。*PIC* ではデータが関連する謎をピカードが解こうとし、その過程で新たな出会いが生じる。その過程で新たな登場人物には、データの存在に大きな影響を受けた者がいることも明らかになる。また、「死んで」いるにもかかわらずデータはピカードの回想や *TNG* や *NEM*

に登場した他の登場人物との会話の中で何度か言及され、彼らがデータの存在を忘れずにいることがわかる。

最終エピソードでピカードは保存されていたデータの意識と意思疎通をした後にデータの二度目の死を見送る。この場面の終末近くに『テンペスト』からの引用、および大幅な翻案と思われる場面（第 8 エピソードに伏線がある）が見られ、この作品を知っている視聴者にはその一部分を思い起こせる構成になっている。そこで視聴者が理解するのは、*PIC* におけるピカードとデータの関係はプロスペローとエアリエルのそれと似通っているが、異なっている部分もあるということである。本稿ではまずピカードとデータの関係性を考えるにあたって、*PIC* が展開する中でそれがどう描写されているか、ピカードの夢や他の登場人物との会話、さらには他の登場人物同士の会話を通して *PIC* と *NEM* 中のヒントとなりうる部分に言及しながら記述する。次いで『テンペスト』におけるプロスペローとエアリエルの関係性はいかなるものであるか、ピカードとデータの関係性とどう異なっているか、そして引用及び部分的ではあるが大幅な翻案は *PIC* の展開にどのような効果をもたらしているかを考察する。

2.1　エピソード 1　「記憶」（“Remembrance”）

冒頭で“Blue Skies”が流れる。これは、*NEM* の冒頭で行われたクルーの結婚式でデータが歌っており、しかも終幕では殉職したデータの意識を移植された個体が口ずさんでいた。*NEM* を見た視聴者ならこの曲を耳にした時点で *PIC* が *NEM* の続編ではと気づくように構成されている。そしてピカードとデータがカードゲームをする場面から物語は始まるが、ほどなくしてこれはピカードの夢であり、ピカードがこの時点においてもデータの消滅を惜しんでいることがわかる。その心情と共に彼が抱えているのは失意である。辞職後のピカードの生活は不自由ではないが充実しているとはいえない。宇宙艦隊への怒りは残り、インタビューに答えれば辞職の背景について執拗に質問され怒りを露わにするなどの言動があり、それを知った宇宙艦隊に疎まれる。

ある日、ピカードのもとに見知らぬ女性ダージ（Dahj）が助けを求めて訪れる。彼女はピカードを知っているが、彼は知らない。彼女を泊めたその夜、ピカードは夢の中でデータがある女性の絵を描いているのを見かけ、目覚めた後その女性が自宅にかかっている絵およびダージに酷似していると気づく。翌朝ダージは姿を消すが、彼は記録保管所に赴きデータの描いた絵がもう一点が保存されていることに気づく。絵のタイトルは「娘」である。ダージが再び現れたとき、ピカードはデータがダージの絵を描いていたこと、データがその後殉職したこと、ダージはおそらくデータの情報を元に造られたシンスであると告げる。ダージはその後現れた謎の集団に殺害されるが、ピカードは真相を究明しようとするうち、データの情報を元に造られた個体がもう一体存在すると知る。ダージのみならずデータも間接的にではあるが、ピカードが辞職後の自分の生き方を“I haven’t been living. I was waiting to die”（35 分 41 秒～ 35 分 43 秒）と反省し積極的に行動を起こすきっかけを与える。

2.2　エピソード 7　「ネペンテ」（“Nepenthe”）

ピカードはエピソード 1 で殺害されたダージの「姉妹」であるソージ（Soji）を探し出して救うべく宇宙に出るが、そのためシンスを抹消しようとするロミュラン人の陰謀に巻き込まれ、旧友（*NEM* 冒頭で結婚式を挙げた二人）の住む惑星ネペンテに避難する。宇宙艦隊に協力を拒まれたため行動を共にするのは自分で探し出した仲間たちと、救出されたソージである。彼女は自分の正体がシンスであると判明して間もないため混乱している。

ピカードの旧友の娘ケストラは外見や血液など人間に極めて近い要素を持つシンスの存在を知り驚くが、その後ソージの「父親」であるデータに話題を移す。彼には多くの能力があったにも関わらず、願いは一つ、“He was always trying to be more human. [⋯] all he ever really wanted to do was, like, have dreams and tell jokes and, like, learn how to ballroom dance”（21 分 23 秒〜 21 分 38 秒）であったと語る。データの願いがここで言及されることがエピソード 10 の伏線となる。同時に、自分を人間だと思っていたソージと人間に近づこうとしていた彼女の「父親」のデータが同時に描写され、作品世界において人間とシンスの境界線があいまいなものになりつつあることがうかがえる。

このエピソードの終盤でピカード一行がネペンテを去る際ケストラとソージは別れを惜しみ、二人の間に友情が芽生えたことを印象付ける。この場面は互いが人間とシンスであると認識した上で親しい関係を育むことができると暗示しており、再びピカードとデータの関係を思い起こさせる。これもエピソード 10 の伏線となる。

2.3　エピソード 8　「真実の断片」（“Broken Pieces”）

ピカードとソージの会話で、後者はデータがいかなる性格の持ち主だったかと尋ねる。ピカードがデータの長所を何点か上げたところ、ソージは唐突とも思える質問をする。

> SOJI. And you loved him?
> PICARD. Yes, in my way.
> SOJI. Did he love you?
> PICARD. Data’s capacity for expressing and processing emotions was limited. I suppose we had that in common. [⋯] I hope he would remember Jean-Luc Picard as someone who believed in him, who believed in his potential, celebrated his successes, counseled him when he fell short, helped him if he needed help, and if he didn’t need it, got out of his own way.（20 分 12 秒〜 21 分 53 秒）

彼と自分はアンドロイドと人間という違いを超えて同じ欠点を持ち、自分が死に彼が生きているとすれば自分を味方ないし親友として覚えているだろうとピカードは断言

するが、データが自分をどう思っていたかについては直接的な表現では表さない。それに対し、ソージは“He loved you”（22 分 06 秒）と断定的に答える。

ピカードとデータが互いをどうとらえていたかを尋ねるにあたり、ソージは繰り返し「愛」という語を使う。唐突に思えるが、ピカードが命がけで自分を救うのは「父親」であるデータとの親密さの故ではないかと彼女は考えているように思われる。この場面は視聴者に改めてピカードとデータの関係性を気づかせ、エピソード 10 における彼らの「会話」の伏線になると言える。

2.4.1　最終エピソード 10 「理想郷（後編）（“Et in Arcadia Ego, Part 2”）[9]

このエピソードにおいてこれまでの伏線が回収される。それと共に『テンペスト』を引用した部分、およびその一部を改変したと推測される部分が展開する。[10]

ピカードがデータの存在をどう認識していたかが SF ならではの形態でデータ本人に知らされる。ピカードと仲間たちはロミュラン人の陰謀を止めることに成功する。それまでの負荷が大きかったことと、かねてから患っていた不治の病のためピカードは死亡するが、ソージや他の仲間たちがテクノロジーを駆使することによりシンスとして再生する。目覚める前に彼は量子シミュレーションの中でデータと最後の会話をする。その中でピカードは

> Before I had even grasped the nature of our predicament, you had conceived and executed it. I was furious! […] Among the many, many things that I regretted was that I never told you...”（44 分 53 秒～ 46 分 23 秒）

と言いよどむ。それに対しデータは言葉を補う。“That you loved me. Knowing that you loved me forms a small but statistically significant part of my memories.”（46 分 26 秒～ 46 分 41 秒）と迂遠な表現ながらピカードへの好意を認める。ここでソージの言葉“He loved [Picard]”が適中したとわかる。「感情の表現と処理能力の容量に限界があった」ピカードは、*NEM* の終盤でピカードたちを助けるためとはいえデータが殉職したことに怒りを感じ、愛情をデータに伝えなかったことを後悔していたとようやく伝える。*NEM* の末尾では既述のようにデータの意識が別の個体に保存されたことが暗示されているので、*NEM* を見た視聴者は、ピカードとデータとの会話は単なる夢ではないと了解し、その多くは二人が互いに対して愛情を持っていたと確認したことに安堵感を持ったのではないだろうか。

シェイクスピア作品が引用されるのは、データの「死」をピカードが手助けする場面においてである。アンドロイドにとっての「死」は脳内情報を消去することであるが、データはそれを願う理由を以下のように説明する。

> I want to live, however briefly, knowing that my life is finite. Mortality

gives meaning to human life, Captain. Peace, love, friendship. These are precious. Because we know they cannot endure.（48 分 02 秒～ 48 分 24 秒）

この台詞の中の“we”は自身もピカードも含んでいるものと思われる。意識を取り戻したピカードはその願いを叶える。“Blue Skies”が BGM として流れる中、データの意識を削除しつつピカードは『テンペスト』でよく知られている一節、“We are such stuff / As dreams are made on, and our little life / Is rounded with a sleep” (IV.i.156-58) を口にする（52 分 44 秒～ 53 分 03 秒）。この台詞は、第 4 幕第 1 場で妖精たちが消えるのと同様に人の一生ははかなく、自分も老いてやがて消え去る身だとプロスペローが心境を吐露する場面で発されている（IV.i.156-58）[11]。「やがて死ぬからこそ人間の一生には意味があり、平和や愛や友情が貴重なのは永久に続かないと知っているからです」というデータの言葉とこの引用は調和している。この台詞が唱えられる際、量子シミュレーションを延長したかのようなイメージが展開する。ピカードが見守る中データは急激に歳老いて死に、さらにはその場面全体が塵のように消え宇宙空間の一部となる。この場面では、『テンペスト』から引用された“We”にはピカードや仲間たちのみならずデータも含まれており、データは願っていた通りに人間として死を遂げたという印象が強まる。また、データが消滅する場面で“Blue Skies”が流れていることで、*NEM* から不完全な状態で続いていたデータの「死」がこれで終末を迎えることを印象付けている。

2.4.2　エピソード 10 における『テンペスト』の大幅な翻案

この場面において、シェイクスピア作品の用いられ方と言う点で注目すべきもう一つの点は、同じく『テンペスト』における別の一節の用いられ方である。大幅な改変が加えられており、それにより大きな効果をこのエピソードに与えていると推測される。この改変が『テンペスト』のどの場面を思い出させるか、そして *PIC* でどのように翻案ないし流用され、どのような効果を生み出しているか、以下で考察する。

エピソード 8 におけるピカードとソージとの会話は前触れであった。そこではピカードにデータへの愛があったと明らかにされる一方で、データが彼を愛していたかどうかはソージの推測にとどまっていた。上述のように、エピソード 10 ではピカードとデータは互いへの愛があったことを確認する。「愛」をめぐるこれらのくだりは繰り返されることで重要性が強調される。そして『テンペスト』の以下の会話からヒントを得たのではないかという疑問をも抱かせる。

ARIEL. Do you love me master? No?
PROSPERO. Dearly, my delicate Ariel. (IV.i.48-49)

婚礼を控えたミランダとファーディナンドに見せる幻影についてプロスペローと相談するうち、エアリエルは突然この質問をする。ミランダたちの愛情あふれる様子を見

るうちにふと思いついたかのようである。それに対しプロスペローは簡潔に答えるにとどめ、話題を戻す。

この場面にいたるプロスペローとエアリエルの関係性はどのようなものだったろうか。概してエアリエルは従順にふるまっているが、そうせざるを得ないほど彼とプロスペローの力関係は明らかである。エアリエルがかねてから約束されていた自由を要求すると、プロスペローは自分が魔女シコラックスの呪いから彼を解放したことと、自分の魔術の強力さを思い出させる。

PROSPERO. If thou more murmur'st, I will rend an oak,
And peg thee in his knotty entrails till
Thou hast howled away twelve winters.
ARIEL. Pardon, master.
I will be correspondent to command, […] (I.2.195-98)

エアリエルは救われるまでの悲惨な境遇に戻されないように、プロスペローに従わざるをえない。カリバンが負わされているような重労働は免れているとはいえ、エアリエルが基本的に奴隷の身分に置かれてきたことは否定できない。プロスペローに“Then to the elements, / Be free, and fare thee well.” (V.i.321-22) と告げられた後、一言もなく姿を消すが、この瞬間エアリエルが全面的に自由の身になったとは解釈しがたい。この台詞の直前にプロスペローが翌日帰国する船に追い風を吹かせるようにと最後の命令を下しているためである。エアリエルが急いで退出するのはその支度にかかるためと思われる。作品世界の中では約束が果たされてエアリエルが解放される場面は見られない。

そのような不利な立場にある者からの「私を愛していますか？違うのですか？」という問いは深刻さを帯びているように思われるが、それに対する短い返答からはプロスペローが実際にエアリエルをどう思っていたかは読み取りにくい。奴隷と主人の間に愛はありうるのか、あるとすればどのようなものか、答えることは容易ではない。そして、人間ではない者（例えば精霊）と人間との間に愛はありうるのかも容易ではない問題である。

『テンペスト』の“Do you love me master? No?”という台詞を知る視聴者は、*PIC* でのピカードとデータの「愛」をめぐるやりとりと比較し、彼らが築いてきた関係性の深さを考えるのではないだろうか。

3　結論

『テンペスト』をごく一部であれ用いたことで、*PIC* にどのような効果がもたらされただろうか。『テンペスト』を念頭におくと、ピカードとデータは部分的にとはいえプロスペローとエアリエルになぞらえられていると考えることが可能である。失意のうちに辞職後の日々を送り自分の過去に関連する出来事が起こった後ようやく行動

を起こすピカードがプロスペロー、元上官に現在の状態から解放してほしいと懇願するデータがエアリエルとなるであろう。しかし、ピカードとデータは *PIC* の以前に人間とアンドロイドという立場を超え、互いに愛情を抱くようになっている。プロスペローと異なりピカードはデータの願いに驚きながらも最終的にはデータの意識を消すという約束を守る。

また、データに会う際のピカードがシンスの身体を持つようになっていることでひねりが生まれている。人間として死ぬ元シンスのデータを、シンスとして生き続ける元人間のピカードが見送る場面で、二人の違いは明確なものではなくなっている。エピソード 7 におけるソージの描写によっても暗示されていたが、ここで人間とシンスの境界線が薄れ、どちらが優位にあるかを問う必要がないことが暗示されている。

PIC は未だ進行中のシリーズで、本校執筆時点ではシーズン 2 まで配信が終わり、シーズン 3 が開始されることが周知されている。*PIC* 全体におけるシーズン 1 の位置付けが完了する前にこれについて論じることに問題があることは否定できない。しかし、『テンペスト』との関連付けが部分的にとはいえ行われているという点で、古典作品との関連を考えることは可能であろう。シェイクスピア作品の引用およびある一節の大幅な翻案により、ピカードとデータの関係性はより直接的な形で視聴者に伝わっている。1.2 で言及した「西洋文化が具体化するもの」という一節は、*PIC* ではデータの言う「平和、愛、友情」であるように思われる。

註

1．https://paramount.jp/startrek-picard/　なお、日本語の公式サイトでは『スター・トレック』となり、「・」がついている。
2．Burt, p.594.
3．https://en.wikipedia.org/wiki/Shakespeare_and_Star_Trek（2022 年 11 月 1 日閲覧）
4．2022 年 11 月 1 日閲覧。
5．*Shakespeare on Stage and off*, p.237.
6．例えば「亡命者」（“The Defector”）の冒頭部分ではデータが『ヘンリー五世』のタイトルロールを演じている。ホログラムで製作したキャラクターも交え、アジンコートの闘いの前夜ヘンリー 5 世が兵士に変装して一般兵士が戦争をどう考えているかを尋ねる場面である（Burt, p.601）。また、同じく *TNG* の「出現」（“Emergence”）冒頭部分では、データが衣装やメイクを用いて芝居がかった様子で『テンペスト』の一節を朗読する。自分を孤島に追放した弟一行を魔術で苦しめていたプロスペローが、彼らに試練を与え終わった後は魔術を捨てると決意する場面である（Burt, p.632）。
7．Kreitzer. P.27.
8．シーズン 1 は 2020 年 1 月 23 日、パラマウントプラス（Paramount+）で配信開始。本稿執筆時点でシーズン 2 まで終了。

9．“Et in Arcadia Ego”はエピソード 9 および 10 のサブタイトルで、「『(理想郷)アルカディアにも私（死）は存在する』と解釈される」(『ラテン語名句小辞典』、93 ページ)。このサブタイトルは、主要人物の誰かが死を遂げることを暗示しており、意味を知る視聴者にはサスペンスを与える。

10. 執筆時点で、エピソード 10 の脚本家マイケル・シェイボン（Michael Chabon）のインタビューを検索したが『テンペスト』の引用等に関する発言を見つけることはできなかった。

11. シェイクスピア作品の引用については参考文献を参照。

参考文献

書籍

Burt, Richard. *Shakespeares after Shakespeare*. 2 vols. Westport: Greenwood Press, 2007.

Christopher, Brandon. “Star Trek’s Shakespeare Problem”. *Shakespeare on Stage and off*, McGill-Queen’s University Press, Montreal & Kingston, 2019.

Kreitzer, Larry. “The Cultural Veneer of *Star Trek*”. *Journal of Popular Culture*. Vol. 30, no. 2. pp. 1-28.

Shakespeare William. Wells, Stanley and Gary Taylor, general eds. *The Oxford Shakespeare: The Complete Works*. Second ed. Oxford: Clarendon Press, 2005.

野津寛編著 『ラテン語名句小辞典』 研究社　2010 年

映画

Star Trek Nemesis. Dir. Stuart Baird. Paramount Pictures, 2002.

テレビドラマ

“The Defector.” *TNG*. Dir. Robert Scheerer. Season 3. Episode 58. Paramount Pictures. 1 January 1990.

“Emergence.” *TNG*. Dir. Chris Bole. Season 7. Episode 23. Paramount Pictures. 9 May 1994.

配信されたドラマ

“Broken Pieces.” *PIC*. By Michael Chabon. Dir. Maja Vrvilo. Paramount +. Webcasted 12 March 2020.

“Et in Arcadia Ego Part 2.” *PIC*. By Michael Chabon. Dir. Akiva Goldsman. Paramount +. Webcasted 26 March 2020.

“Nepenthe.” *PIC*. By Samantha Humphrey and Michael Chabon. Dir. Douglas Aarniokoski. Paramount +. Webcasted 5 March 2020.

“Remembrance.” *PIC*. By Akiva Goldsman and James Duff. Dir. Hanelle

Culpepper. Paramount +. Webcasted 23 January 2020.